

D—15 乳歯齲蝕予防についての研究
—総窒素量，蛋白窒素量—

茨城大教育 津田 理子

1. 小児齲蝕は小児の発育，全身状態に影響するばかりか

りでなく、小児疾病にも関係があるといわれ、この予防は医歯学上のみならず保育学上からも重要で齲蝕から小児を守る対策についてはすでに各方面からの報告がある。齲蝕発生に関する諸因子中、歯の周囲環境である唾液性状の研究も肝要であるとの考えから著者は年来、小児唾液の各種成分について研究しているが、今回は小児唾液の蛋白質を測定しこれと乳歯の環境諸事項、齲蝕の関係を検討した。

2. Mikro-Kjeldahl 法を用いた。本法は広く化学的実験に用いられているが、唾液内蛋白質定量に応用するための検討も行なった。

3. 1) 唾液内蛋白質定量を行なうための基礎的研究として、唾液採取時の温度と遠心操作の有無をみたところ、前者では有意差なく後者では無操作のものと10,000回転で操作したものに有意差があった。2) 乳児、幼児成人の総窒素量では幼児がもっとも高く、成人、幼児間には有意差はなく、成人と乳児、乳児と幼児の間には有意差があった。なお、乳児については食餌の種類、萌出歯の有無を、幼児については齲蝕の有無につき検討したところ、前者には有意差はなかったが後者には有意の差がみとめられた。